にポッカリと空洞があいた　力学生に対抗する、「良識　くの学生が入ってきた。　勝氏、斎藤英俊氏などが参

第11回 石井至の世界放浪記

戦没学徒追悼会に初参加

今、この原稿はマニラで書いている。

今年の十月二十一日は何の日であったのか、読者の皆さんはご存じだろうか。

学徒出陣から七十年目の日だ。七十年前の一九四三（昭和十八年）、それまで徴兵を猶予されていた大学生のうち二十歳以上の文系の大学生が徴兵されることになった。十月二十一日にその出陣学徒の壮行会が今の国立霞ヶ丘競技場で行われた。文部省主催で雨の中で行われた壮行会には、東京及び近県から約二万人の出陣学徒が集結し、スタンドには女子学生を中心とした約五万人の送別学生が見送ったとされる。

全国および海外から出陣した学徒の数は九万とも十二万とも言われているようだ。いつも思うことだが、命を犠牲にした（あるいは、する覚悟を持って出陣した）学生の数すらわからないというのは情けない気がする。学徒を出陣させるくらいだから戦況はかなり悪化していたのであろうが、それにしても人数もわからないほど切羽詰まっていたということだろうか。

私は木村三浩さんに誘われて今年初めて参加した。一水会の関係者では、木村さんと私の他、一水会アドバイザーの駒井さんも忙しい社長業の合間を縫って参加してくれた。

ただ、私が参加したのは単に木村さんに誘われたからではない。私には大学生の息子がいる。国家のためとは言え、その息子がこれから戦争へ行くのかと想像すると、それだけで居たたまれない気持ちになったからだ。当時の親の気持ちを察すると堪らない。

何しろまだ弱冠二十歳なのだ。四十で死ぬのも、平均寿命を考えると非常に若死だが、四十まで生きれば人生のある程度のことは経験したということになる。それが二十歳だと、まさに人生これからという時だ。国家のために死ぬことが当たり前の時代だったとしても無念だったに違いない。

それを思うと、今の大学生は戦争で死ぬわけではなく平和な時代を享受しているのだから、しっかりと勉強をして二十一世紀の世界・日本のために活躍してほしいと思う。

今年の戦没学徒追悼会は、慶應と早稲田の二大学の卒業生が中心に実行委員会をつくり合同で行ったため、例年より多くの参加者を迎えられたとのことだった。

慶應からは元塾長の鳥居先生も参加していた。慶應大学の敷地には「帰らざる学友の碑」がある。第二次世界大戦において志半ばにして逝った学友を偲び、かつ永く記憶にとどめるための記念碑として、平成十年に設置されたということだ。大学の公式ホームページにも出陣学徒についての明確に記載がある。早稲田も同じだ。早稲田からは元総長の出席はなかったが、大学敷地内に戦没学徒を偲ぶ碑があり、同じく大学の公式ホームページに記載がある。

母校・東大にも碑を

一方、残念ながら私の母校の東京大学には、大学の敷地内には戦没学徒を偲ぶ碑はない。正門から道路を挟んだ反対側の私有地にある。国立大学だから敷地内に設置するのは難しいのだろうか。七十年前は文部省主催で出陣学徒壮行会を行ったのに、戦争に負け新しい時代になると、国立大学は敷地の提供すらできないということだろうか。

今年は、早慶合同で戦没学生追悼会をやると事前に木村さんから聞いたので、東大のしかるべき人に「東大卒業生に出陣学徒を追悼するグループがあれば紹介してほしい。追悼式を早慶は合同で実施する。東大も参加すべきではないか」と伝えたが、何の連絡もなかった。

私がリーダーになってやってもよかった。ただ、すでにそういうグループがあるのであれば、バラバラにやるよりも一緒にやろうかと思って遠慮してしまった。結局、そういうグループがあるのかも、わからず仕舞いだ。私の場合、祖父や父が出陣学徒であったわけではないので、その私が中心になってやっていいのだろうかという躊躇いが今でもある。しかし、そんな私でよければ、一歩を踏み出して何かを実行しなければいけないと思った。

慶應大学卒業生である我らの木村さんも追悼会の実行委員の一人で、閉会の辞を述べていた。立派なスピーチだった。

歴史にも政治思想にも疎い私でも、学徒出陣は忘れてはいけないことだと思っている。また同時に素朴な疑問も感じている。

たとえば、七十年前は出陣学徒壮行会を文部省主催で行ったのに、戦後の戦没学徒追悼会には国は関与していない。戦前の政府と戦後の政府は継続性がなく、まったく別物で関係ないということなのだろうか。

また、二〇二〇の東京オリンピック・パラリンピック開催決定は慶事ではあるが、国立競技場の新設工事のために「出陣学徒壮行の地」碑は撤去されるという。如何なものだろうか。工事のために一時的に移動するというのであればよい。しかし、新しい競技場の敷地には碑は戻せないというのであれば、国の犠牲になった人たちに対してあまりにむごい仕打ちではないだろうか。

同じようなことが、戦没者の遺骨収容についても感じる。国のために命をかけて戦った人たちの骨を拾うこともできていないのである。素朴におかしいと感じるのは、私の思考回路が右翼的だからであろうか。私の中では、そのくらい当たり前のことは、右も左もなく、けじめをつけて当然だと思っている。

石井　至（いしい・いたる）

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエズ銀行を経て、平成九年に石井兄弟社設立。同社代表取締役。金融ハイテク技術コンサルタントを行う他、東京にて幼児教室「アンテナ・プレスクール」を主宰。